

横光利一『七階の運動』論

—「永遠の女性」を穿つ（身体）—

矢 本 浩 司

横光利一の『七階の運動』（一九二七年九月、『文芸春秋』「芥川龍之介追悼号」）は、吉行エイスケの『女百貨店』（一九三〇年二月、『近代生活』）や『享樂百貨店』（同年五月、『モダンTOKYO円舞曲』、春陽堂）、伊藤整の『M百貨店』（一九三一年五月、『新科学文芸』）などに先行し、いち早くモダニズムの反映として「百貨店」（デパートメント）をとらえている。

しかし、横光利一文学の真価は、そうしたモダニズムの表層を作品に反映させた点や、修辭技巧の妙にあるのではない。それは同時代の言説空間との共時性のうちに見出せる〈近代〉へのまなざしにあるのだ。〈制度〉を穿つ『七階の運動』は、それが端的に表れた格好の例である。

『七階の運動』で、能子に「あなたは人間の感能がお金でどこまで発達しているか、験べる機械のようなものよ。」「あなたは

お金よ。たつたそれだけ。」といわれる百貨店の道樂息子久慈は、毎日ショッピングガールたちの言動を「お金」に換算する貨幣万能主義者である。その久慈は、不断の「巡礼」で振り撒く「お金」で百貨店の各層に拘束されているショッピングガールたちを結合させ、「永遠の女性」像を成立させている。差し詰め久慈は「永遠の女性」の体内を循環する血液であり、ショッピングガールたちは、その久慈により、それぞれ胴や手足などの「永遠の女性」という全体（組織）の構成に必要な「器官」パーツに見立てられている。例えば、二階の鬱子は「胃袋のように動く」が、身体の一器官である胃袋は、「永遠の女性」のパーツとしての役割分担の場に固定された状況を暗示させる。このほか「レットテルのように埋まっている」で、久慈が「もう少し、暴れなければ。」というのに対し、「だつて、暑いわ。」と動くことを拒否する三階の桃子、「婚礼調度品の大鯛小鯛に挟まって」、「汗をかいたまま夕暮れの来るのを待っている」四階の丹子、「金属の中に刺った花のように浮いている」五階の鳥子、「鏡の中にい」て閉じ込められたイメージを喚起さ

せる六階の容子らは、いずれも同様のイメージを与える。

久慈によつて一枚か二枚の「十円紙幣」に換算される彼女たちは、いわば「永遠の女性」の成立に不可欠なパーツとして金で買われた商品である。その意味で、さまざまな商品が売買される百貨店の各層で、香水や鏡などの商品のなかに彼女たちがじつと埋もれている姿は象徴的だ。

とりわけ一階の競子は商品的な存在である。彼女は勤務中に久慈へ視線を送り、「久慈のネクタイへ息を吐きかけ」、彼を誘惑する。彼女は能子と久慈を張り合い、能子に邪魔をされると「足先で床を叩く」。もちろん競子と久慈の間には性交渉があるはずだが、「紙幣」と交換に自身の身体を売り物にしている競子は、誰よりも商品的である。

だが、このように「永遠の女性」という全体を完成させるために、金で買われてパーツとしての役割を果たすショッブガールたちのなかで、能子の存在は異質だ。能子には久慈の「十円紙幣」の効果がない。そればかりか、能子は久慈に「一枚づつお紙幣をくばつて降りて来て、それから競子さんを自動車に乗せて飛び廻ることなんか、新しい仕事だなんて思えないわ。」といい、「誇らかな競子の半世紀遅れた肉感」を「諧謔で壓倒」そうとする。久慈と二人でホテルへ行つても身体を許さない能子は、金と身体との交換＝売春行為は決して「新しい仕事」ではなく、むしろ「半世紀遅れ」としていると批判するのだ。このような能子はいかなる存在なのか。

二

身体の静止の拒否

「あたしは動かないでじつとしていて、草のようになってしまつて風邪をひくの。」

身体の解放

「あの裸体姿を見てみると、身体が風のように拡がつて飛びたくなるの。」

身体の躍動

「久慈の手を持つて、引き摺り降ろすと、突きあたりながら踊り出した。」

身体の動態

「能子は久慈の膝の上へ飛び移ると、櫓を漕ぐように身体を前後に揺り動かした。」

以上は身体の静止の拒否、身体の解放、身体の躍動、身体の動態と、ホテルでの能子の特徴的な形象を表す箇所抜粋である。これらの身体表現は、他のショッブガールたちが「永遠の女性」のパーツとして固定的であるのに対し、能子の動性を示す（能子の〈能〉も能動的なイメージを喚起させる）ばかりではない。他のショッブガールたちの商品性に対し、能子の躍動感溢れる身体は、金との交換を許さない商品として相対化されない固有の身体を強調しているのだ。

例えば、能子は二羽の鷺鳥の泳ぎを「古風な恋愛」だと見なし、「欄干の上で逆立ちしてみたくてならない」という。また、久慈は能子に「君だけは、百貨店の法則から逆に進行していてくれ」ともいつており、「久慈は能子に逢うと世界が新鮮に転倒」するという記述もある。種々の商品が（一般的等価物）としての貨幣と交換される百貨店で、ショップガールたちの身体すら商品として貨幣と交換される。いわば「逆立ち」、「逆行」、「転倒」などの一連の表現は、資本主義における貨幣万能主義観の「転倒」であり、「永遠の女性」の各パートとして相対的（均質）に還元されない独立の身体を有す個の尊重を強調しているのだ。能子が「古風な恋愛」を批判するのも、「永遠の女性」像に規定されないのと同様で、理想（普遍）化された「恋愛」の形式（制度）に独立の個が規定されることへの拒絶なのである。

したがって、「永遠の女性」を夢想する貨幣万能主義者の久慈に、能子は決してとらえられないのだ。能子は久慈の誘惑から脱れ、ホテルでも性交渉はない。二人の間で「結婚」が話題にのぼり、能子が久慈に「あたしと結婚なさるおつもりなの？」と尋ねても、久慈は「いつまでも黙っている」しかないのだ。「永遠の女性」を幻視する久慈には、現実問題である「結婚」はリアリティーをもつて迫らない。それは、たとえ能子が現実世界を生きる（生身）の久慈を認識したとしても、久慈は最後まで能子を「永遠の女性」像のパートとしてしか認識できないからだ。

能子は、「青春とはかくの如し」と新婚の若夫婦に透徹したま

なざしを向けて羽根枕を叩き、「古風な恋愛」を見ると、その羽根枕を「目茶苦茶に叩きつけてやりたくなる」。彼女は久慈に「まア、あなたは、結婚とはどんなことだか御存知ない」と見えるわね。」といい、「結婚なんかいたしません。」と断言する。能子は自己を規定する「制度」としての「結婚」をよく「存知」ていて、それを拒絶しているのだ。

久慈の「お金」の誘惑を拒絶し、結婚を否定する能子は、自己の身体のみを頼りに切実な「生活」を送っているはずだ。女性の収入は男性より低いばかりか、当時の百貨店の店員の収入はその華やかさとは対照的に、事務員や商工業に従事する他の職業婦人の収入に比しても格段に低かった¹。一日中立ち通しの百貨店の苛酷な労働条件²にあり、ホテルでの一時でさえ「明日の朝は電車で足を踏まれぬように」と「生活」の現実を考えている能子は、ともすれば自己の生存を脅かす抜き差しならない現実（日常）、「生活」の世界に、その（生身）の身体一つで直面しているのだ。こうした深刻な「生活」事情にも関わらず、久慈を拒み、自己の（生身）一つで生きる能子の生き様に、解放された、自立した女性の誇りと尊厳が見出せる。一方の久慈は大金を自在に操り、その「生活」は嘘のように方便³である。「永遠」は不老不死、不朽不変を想起させるが、「永遠」の「女性」を夢想する久慈には、生々しい現実への実感や生活感があり得ない。

例えば、能子は「永遠の女性」の構築のためとはいえ、（生身）の身体を駆使して百貨店の一階から七階までを階段で駆け上がる

久慈の毎日の「運動」を評価している。このような能子の抛り所は、決して架空の「永遠の女性」像のパーツに規定されるものではなく、独立した自己が「生身」一つで生きる現在、現実の「生活」世界にこそあり、現実世界を経験する身体こそが重要なのだ。³ 現実と離れた「永遠の女性」や、自由を奪い「家」に閉塞させる「結婚」などの、何ものかの価値観や「制度」の下で役割に付され、規定（意味付け）されることを拒絶する能子は、「生身」の身体に迫る生き死にの「生活」世界とそこを生き抜く身体こそを尊重しているのだ。

このような能子の特性は、久慈と二人でホテルへ向かう途中の以下の描写に暗示的だ。

水滴型の自動車が、その膨れた尖端で、街を落下するように疾走した。久慈と能子がホテルへと行くのである。ガードの下腹、鉄の皮膚に描かれた粗剛な朱色の十字を指差して、能子は云った。

「あなた、あたしはあれが怖いのだ。」

久慈が振り向くとガードの上を貨物列車が驀進した。擦れ違うオートバイ。電車の腹、警官の両手をかすめてトラックが飛び上る。キャナルの水面に光った都会の足。下水の口で休息している浚渫船。

「あなた、あたしは、あれが好きなのだ。」

ここには能子の怖れの世界と好みの世界の二種の指標がある。前者の方には、貨物列車やオートバイの交差、警官の両手をかすめ

るトラックなどの近代的な乗り物による多様で複雑、急速な「都会」の交通の風景がある。「電車」は近代機械文明を表象する典型だが、こうした近代的な交通の発達に片鱗を見せる機械文明、資本主義社会にあつて、「生身」の個は規定され、疎外される。

例えば、競子を初めとするシヨップガールたちが、ブルジョワ階級の久慈が振り撒く「お金」と自己の身体を交換しているように、資本主義社会では、「（一般的等価物）」である貨幣によって「生身」の身体さえも交換され、相対化される。能子はそれを危惧しているのだ。久慈の貨幣で各パーツが結合して創造される「永遠の女性」像は、そうした構造を象徴している。一方の彼女が好む風景にある浚渫船が休息する「下水の口」は、近代都市の排泄物が送り込まれる場所である。能子は、この排泄物の溜まり場に、機械文明、資本主義社会から排泄（疎外）される「生身」の暗示を見ているのだ。能子は「あたしは野蛮人が大好きよ。」「野蛮人を軽蔑するのは、文明人の欠点よ。」と「野蛮」を肯定する。能子のいう「野蛮」は、自然の、ありのままを晒す「生身」の身体の実在の指標であり、機械の歯車（組織）の一器官（パーツ）として規定し、人間性を喪失させ、排除、抑圧する近代機械文明への抵抗の指標なのだ。

このように『七階の運動』では、久慈と能子に焦点があてられているにも関わらず、両者の間には何も起こらない。久慈と能子の間に「恋愛」が生じ、それが成就（結婚）するわけでもない。ホテルへ行っても、二人の間に性交渉はない。また、久慈の理想

である「永遠の女性」が完成するわけでもなく、かといつて久慈がその考え方を改めるわけでもない。もちろん久慈と能子の別離の悲劇が描かれているわけでもない（そもそも二人は最初から関係していないのだから）。終始久慈は「永遠の女性」を巡る円環的な「運動」を続け、能子はその「頭」を横に振るばかりだ。

また、作品の冒頭は「今日は昨日の続きである。」という記述からはじまるが、結末の一節にも「今日は昨日の翌日だ。」と記されている。さらに、冒頭の一節にある「吐瀉」を続ける「エレベーター」や商品に埋没しているショッパールたちなどの百貨店の日常の風景は、結末の一節でも全く同様に記述されている。

この冒頭と結末の同一の一節は、不変の時間、日常の反復、作品の円環性を表している。加えて、「七階の運動」という表題も単に現象を示すに過ぎず、これに決定的なものは見出せない。このように作品『七階の運動』には、一定不変の時間と日常の反復が表されているだけで、物語の発展や結論、決定はない。ただ久慈と能子の対照（差異）が晒されているだけなのだ。

つまり、「永遠の女性」という作り物に規定されない現実を（生身）の身体一つで生きる能子と共鳴するように、物語の展開、一定の方向性が示されない『七階の運動』という作品自体が、現実（読者）の前に晒されているのだ。

三

『七階の運動』は一九二七年九月の『文芸春秋』『芥川龍之介追悼号』に発表された。これに先立ち芥川龍之介と谷崎潤一郎との間で交わされた（小説の筋）論争では、小説の芸術的価値を巡って、「話の筋」（プロット）が問題視されている。谷崎が「筋のおもしろさ」（筋の組み立て方）＝プロット、「構造的美観」を重視するのに対し、芥川は「話らしい話のない小説」、「詩的精神」がある小説を肯定するわけだが、実は、横光の「話らしい話のない小説」といえる『七階の運動』は、芥川の見解に示唆を得ているのだ。

例えば、ゲーテの『ファウスト』に高い空へ「永遠なる女性」はわれらを引きて昇らしむ」とある。「永遠なる女性」とは天空のマリアを指示するが、これを踏まえたと思われる正宗白鳥は、『ダンテに就いて』（一九二七年三月、『中央公論』）でゲーテを引用した後、ダンテにとつてはヴェアトリッチェが「永遠の女性」であると述べている。さらにこれを受けて、芥川は『文芸的な、余りに文芸的な』（二一 正宗白鳥氏のダンテ）（一九二七年五月、『改造』）で白鳥と同様にゲーテに触れた後、次のように述べている。

ダンテは晩年に至っても、所謂「永遠の女性」を夢みていた。しかし所謂「永遠の女性」は天国の外には住んでいない。のみならずその天国は「しないことの後悔」に充ち満ちている。丁度地獄は炎の中に「したことの後悔」を広げているように。「天国の外」、つまり現実世界に「住んでいない」「永遠の女性」

は、作り出された観念であり、幻想である。天空のマリアや記憶のなかのヴェアトリーチエが「永遠の女性」に（仕立て）られると、現実を生きた本当の彼女たちの（生身）の姿は隠蔽される。

芥川は『西方の人』（一九二七年八月、『改造』でも「マリアは永遠に女性なるもの」（二一 マリア）ではないと断じている。『西方の人』ではニーチェがよく引かれているが、ニーチェの『この人を見よ』では、「わたしは、『永遠の女性』の本質に通じた最初の心理学者である」と語られ、「狂乱」、「邪悪」、「利口」などの「永遠の女性」像に隠蔽された女性の生々しい「心理」（眞実）が述べられている。また、こうした「永遠の女性」の対照は、芥川が『文芸的な、余りに文芸的な』で取り上げるゴーギャンの「タヒチの女」に見出せる（三十『野生の呼び声』）。芥川は「タヒチの女」が「視覚的に野蠻人の皮膚の匂いを放っていた」と述べ、そこに「野生の呼び声」を感じる。芥川はゴーギャンの「タヒチの女」に威圧され、現実の「タヒチの女」に見こまれたのに近い威力がある」というが、現実の（生身）の姿を隠蔽する「永遠の女性」に対し、ゴーギャンの「タヒチの女」は、ありのまま（『野生』）の姿で眼前に迫る。「野蠻」を肯定し、積極的な身体表現をする『七階の運動』の能子の（生身）の姿はこれに呼応する。『小説の筋』論争の只中であつた芥川は、「永遠の女性」という（話）の（筋立て）（美的構築）に規定（隠蔽）される、現実を生きた女性の眞の姿に目を向けた。『七階の運動』で「永遠の女性」を巡る久慈と能子の対照は、この文脈に敏感に反応したも

のにちがいない。例えば、久慈の「心理学」が能子の前ではいつも「狂う」ように、彼は『「永遠の女性」の本質に通じた最初の心理学者』にはなれない。久慈の「永遠の女性」は、「永遠の女性」として非現実的理想化されたマリアやヴェアトリーチエと同質であり、逆に、「タヒチの女」が放つような現実世界を生きる（生身）の女性の姿は、ほかならぬ能子に見出せるのだ。

芥川が肯定するのは、あたかも（話）も（筋）もない（詩）のように、技巧を凝らして専ら（外殻）を立派に見立てた（美的構築）作り物臭さを取り除き、詩的世界や詩的風景を有すありのままの（中身）（詩的精神）を晒し、現実世界の読者に直接迫るリアリティーである。例えば、芥川は「話らしい話のない小説」の例に「写生文脈の小説」を挙げている。写生文は、現実の世界から受ける美観を自然（ありのまま）に、客観的に写生するのだから、その主眼はリアリティーの追求にある。つまり、写生文には作者による（筋立て）（規定）はなく、ただありのまま（リアリティー）があるだけだ。芥川のいう「話らしい話のない小説」とは、作者の意図（恣意）によつて一義的に構築された小説が強い読みの（制度）性を回避し、ただ晒された（中身）だけが読者に直面するような小説のあり方をいうのではないか。

芥川は遺稿『十本の針』の「十言語」で次のようにも述べている。

わたしたちはわたしたちの気持ち容易に他人に伝えることは出来ない。それはただ伝えられる他人次第による。

ここには言語観の揺らぎが噴出してゐる。言語は発信者のいいなりにならず、「他人」(受信者)に委ねられる。したがつて、言語表現である小説は作者のいいなりにならず、読者に委ねられるということになる。例えば、貨幣と言語はしばしば構造的類似性が指摘されるが、完全な「永遠の女性」が「お金」によつて構築されるという久慈の貨幣万能主義観は、(筋のおもしろさ)を工夫して構築された「話」が、実は言語の絶対性に保障されていることと似ている。「永遠の女性」の制作者である久慈が能子を「今の百貨店の売上高ではわからない」というのは、彼が「お金」(貨幣)の絶対性を疑うことを知らないためだが、同様に作者が言語の絶対性を信じるがゆえに、言語による完全な美的構築——義的な解釈を強いる小説の完成という理念が生じるのだ。つまり、自己を規定する「永遠の女性」に還元されず、現実世界を生きる自立した(生身)の身体を尊重する『七階の運動』の能子を認めることは、決して特權的な作者のいいなりにならない不透明な言語が集積した小説が、読者の前にありのままを晒すことを認めるのと同様なのだ。

四

『七階の運動』では、「永遠の女性」を夢想する久慈に典型を見る男性の一方的な女性に対するまなざしに、女性を規定、抑圧する(制度)性が嗅ぎ取れる。例えば、「永遠の女性」の一例で

ある聖母マリアに含意される「母性」¹⁾は、女性に(母)として子育てに専念させ、(家)への閉塞を強要する。このほか「永遠の女性」に付与された従順性や純粋性(ヴェアトリーチエ)は、女性の自立心や自由を奪い、抑圧する。このように男性によつて作られた女性像である「永遠の女性」には、さまざまな女性へのおしつけ、規定が含意されている。つまり、「永遠の女性」は男性による(制度)的思考の産物なのである。

これに対して、自由を謳歌するモダンガールの出現や、自立を目指す職業婦人の社会進出などは、女性を抑圧する(制度)への反逆の表現だ。例えば、(新感覺派)の名付け親である批評家千葉亀雄は「何がモダンか」(一九二七年六月、『女性』)で、モダンガールの出現のそもその意義(——「目標」)を取り上げると同時に、「単に女性の美によつて男性をひきつけ、恋愛技巧の遊戲に浮き身をやつし、モダンイズムの表層に耽溺する女性を批判し、次のように述べている。

目標は、男性に占有された男性の世界を破つて、いかに女性に堂々と共同戦線を張り、自分達の世界を、男性と平等段階までに築き上げたかにある。それが順序としては、新女性の関心は、単に第一次性であるところの狭いセックスの範囲だけに捉われてはならない。何よりも先ず男性がこれまで築き上げたところの、あらゆる社会構成に凝視を向けねばならない。(中略)さて、それほど理性が発達し、知識が洗練され

て居るならば、かれ等は生きた現実の前に立つて、どれほどの見識を示したであろうか。

『七階の運動』では、競子を初めとする百貨店のショップガールたちに、資本主義システムに搦め捕られ、恋愛中心の退廃に自己を貶める(＝身体を売り物にして男性に隷属する)モダンガールの悪しき一面がとらえられている。これを批判し、「生きた現実の前に立」つ能子に、モダンガールの「目標」＝男性に支配、抑圧されていた女性の解放、自由、個の尊重が見出せるのだ。つまり、『七階の運動』では、現実の女性(能子)を規定、抑圧する男性(久慈)の(制度)的思考の産物であるという「永遠の女性」の本質が、とりわけモダンガールの実状を示す(身体)表現によって露となり、批判されているのだ。

さらに、こうした「永遠の女性」のパーツとしての規定を拒絶し、(生身)の身体一つで現実を生きる能子をファクターとして、そうした(生身)を疎外(隠蔽)する近代の(制度)への批判という小説の内実(＝(中身)と、読みの(制度)性を回避する作品の構成(＝(外殻)が呼応することで、『七階の運動』という言語表現の集積物は、「話らしい話のない」＝作者が一方的に読者に意味を付与(規定)しない小説の実践物として現実(読者)に晒されたのだ。

註

(1) 例えば、一九二七年五月の京都市役所社会課による報告『職業

婦人に関する調査』によれば、百貨店の店員一三三人を含む女性店員一五〇人の平均月収は二六・〇――一円であり、女性事務員の平均月収三四・五四八円をはじめ、他のどの職種よりも格段に低い。また、一九三一年二月発行の東京市役所編『婦人職業戦線の展望』『統計編』を見ても、百貨店の女店員の平均月収二九円は、女性事務員の平均月収三七円、商工業に従事する婦人の平均月収三六円より低い。

(2) 川崎ナツの『職業婦人を志す人のために』(一九三二年一月発行、現人社)によれば、百貨店の店員は「終日冷たいコンクリートの上に立ち通しですから、勢い扁平足とか、冷え込みとかの病気に羅り易い事など、一応考慮に入れないならなりません。」とある。また、前掲の『職業婦人に関する調査』によれば、百貨店の勤務時間は平均九時間から九時間半であり、夜勤もある。また、三件の百貨店のうち一件は休憩時間が無く、一件は不定であり、残りの一件も一回、一時間だけである。

(3) (生身)の能子が生きる現実世界は、後期のE・フッサールが『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(一九三五―三六年)で述べる「生活世界」や、メルロ・ポンテーイがいう世界の内で行為する(身体)を想起させる。

(4) 例えば、マルクスは『ドイツ・イデオロギー』のなかで、都市や地方などの交通の強度(拡大)と生産性の密接な関係を指摘しているように、交換の発達(資本主義)は交通の拡大とともにあり、生産力の向上は、技術(機械)の発達とともにある。また、

同時代の柳田國男は『明治大正史世相篇』（一九三一年一月、『明治大正史』第四卷として刊行、朝日新聞社）で、「都市はいつの間にか驚くほど大きくなっていった」といい、「経済都市」という表現を用いて「新しい交通系統はまずこれを支援した」と説明している。

- (5) ニーチェの『ツアラトゥストラ』では、「回帰の円環」が「永遠の女性」とともに激しく求められている（第三部末「七つの封印」）が、いわば、『七階の運動』でも一階から七階までの各層に、パットとなるショッップガールたちが「封印」されているのだ。↓註(9) 参照。

- (6) 第二部第五幕参照。

- (7) (1)では、原語「Das Ewige Weibliche」の「エーヴィヒ」を「副詞でなく形容詞と解すべき」だとして、「永遠に女性なるもの」とせず「永遠なる女性」と訳した相良守峰訳『ファウスト』下巻「註」、一九五八年三月、岩波文庫）に従っておく。

- (8) 芥川は『侏儒の言葉』（一九二三年一月〜二七年十二月）でも「永遠に女性なるもの」を崇拜したゲエテは仕合せもの」だと揶揄している（「女人崇拜」）。

- (9) 『この人を見よ』だけでなく、『ツアラトゥストラ』（第一部「詩人」や第三部末「七つの封印」など）にも「永遠の女性」という表現がみられる。あるいは、久慈が「永遠の女性」を構築せんがために繰り返す「七階の運動」は、子供を生ませたい「女性」としての「永遠」や、「回帰」、「円環」を賛美する「七つの封印」

に共鳴するか。

- (10) 『西方の人』や『続西方の人』（一九二七年九月、『改造』で神の愛や奇跡などの形而上的なものでなく、「生活者クリスト」の行為に注目されるのも同様である。

- (11) 芥川の見解を踏まえ、近代の「制度」を見つめる横光は、『感覺のある作家達』（一九二八年八月、『文芸春秋』）で、「新しい文学の形式は、その時代の民族の生活形式から生まれて来ると云うたのは、言語学者の権威ソッシユールのみの言葉ではないであろう。」と述べているが、横光文学は言語観の転回が生じた世界的同時性のうちにあったのだ。

- (12) 例えば、櫻井兵五郎は「モダンガールと職業婦人」（一九二七年八月、『女性』）で、職業婦人と「結婚」や「母性」を対比して論じ、次のようにいつている。

天が與えた女性への使命の一つは、母性として生き抜くこと云うことにあると云われる。その様に母性として、生きるためには、最善にして、最大の努力が払われねばならない。

※横光の引用は『定本横光利一全集』（一九八一年六月〜八七年二月、河出書房新社）、芥川の引用は『芥川龍之介全集』（一九七一年三月〜一月、岩波書店）、千葉亀雄の引用は初出（一九二七年六月、『女性』）によった。ただし、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。

（やもと・こうじ 本学大学院博士課程）